東邦学誌第47巻第1号抜刷
２０１８年６月１０日発刊

児童福祉に貢献した女性たち
～賀川ハルと村岡花子～

藤　沢　真理子

愛知東邦大学

東邦学誌
第47巻第１号
2018年６月
論　文

児童福祉に貢献した女性たち
～賀川ハルと村岡花子～

藤　沢　真理子*

目次

１．はじめに
２．著作からみる賀川ハルと村岡花子の関係
３．二人をつなぐ村岡平吉
４．二人の子ども時代
５．二人の高等教育と職業
６．二人の信仰
７．二人の結婚
８．賀川ハルと村岡花子の子どもたち
９．賀川ハルと村岡花子が体験した関東大震災
10．二人の児童福祉活動
11．まとめ

１．はじめに

2014年９月２日から10月31日まで、神戸市の賀川記念館で、「花子とハル」特別展が開催された。花子とは、『赤毛のアン』の翻訳をはじめ、多くの児童文学作品を生み出した村岡花子である。ハルとは、社会改良家で宣教師の賀川豊彦の妻、賀川ハルである。ハルは、夫と共に神戸のスラム街で働き、関東大震災以降東京で震災支援に当たり、夫亡き後は東京の雲柱社と神戸のイエス団の理事長となり、多くの児童福祉事業を運営した。村岡花子は文学を通して、賀川ハルは福祉や教育を通して、日本の児童福祉に貢献した女性たちである。

村岡花子と賀川ハルは親戚である。村岡花子の夫と賀川ハルが従弟であり、ハルの伯母は花子の姑になる。

賀川記念館で開催された特別展は、2014年４月から９月まで放送（2017年９月から2018年３月までBS再放送）されたNHK朝の連続ドラマ「花子とアン」がきっかけである。このドラマは村岡花子をモデルにその生涯を描いたものであり、原作は村岡花子の孫にあたる村岡恵理の『アンのゆりかご』である。この本の中に賀川豊彦やハルに関する記述があることから、神戸の賀川記念館関係者が二人は親戚であることを知り、特別展を企画した。

* 愛知東邦大学人間健康学部

神戸新聞（2014年７月７日）によると、賀川記念館関係者はNHKドラマ「花子とアン」の中で、ハルの伯父、そして花子の舅にあたる村岡平吉の葬儀の場面で賀川豊彦やハルが登場するのではないかと期待していた[1)]。

原作『アンのゆりかご』の中では、村岡平吉の葬儀が横浜の指路教会であったこと、牧師である賀川豊彦が司式をしたこと、平吉の姪であるハルも参加したことが描かれている[2)]。

賀川記念館関係者は賀川ハルと村岡花子が「平吉の葬式で顔を合わせたのは確実」と言い、ドラマの中で二人が共演するのではと期待した。しかし、ドラマの中で「村岡平祐」という名前で度々出演していた平吉は、亡くなる場面も葬式場面もなく、突然遺影となって花子の家の茶の間に飾られていた。そのシーンを見た賀川記念館関係者は大いに残念がり、2014年９月３日付の神戸新聞に「『いやもうガックリや』。同館参事の西義人さん（71）は、苦笑いを浮かべた」とあり、平吉の葬儀がドラマで描かれなかったことを残念がる記事が書かれている[3)]。

筆者は、特別展の語り部として、延べ200人以上の来場者に賀川ハルと村岡花子について解説した。来場者の多くは神戸新聞の記事を見たという人であり、「あの記事は率直でよかった」という感想を会場で聞いた。実際、特別展来場者の半数以上はNHKドラマ「花子とアン」や村岡花子のファンだったので、賀川記念館に来るのが初めてという人が多く、賀川豊彦、妻のハル、そして神戸のセツルメント活動について知らなかった。賀川記念館は、特別展をきっかけに賀川豊彦やハルについて多くの人に知ってもらいたいという願いをもっており、筆者が特別展で花子やハルについて解説すると、夫である賀川豊彦の活動についても知りたいというので、常設展に行かれる方も多くいた。

神戸新聞には、賀川記念館によると「花子とハルに親交があったとの記録は確認できないが、1922年に平吉の葬儀が横浜指路教会（横浜市）で営まれた際、司式を豊彦が務め、ハルも同行。同館は『教会で顔を合わせたのは確実』とみる」とある[4)]。

筆者は特別展直前に語り部となったので企画に直接関わっていない。企画した方々から話を伺うと、特別展企画の段階では「花子とハルにどのような親交があったのか確認できなかった」という。

本稿では、まず二人がどのような親交があったのか明らかにしたい。そして、二人がどのような生涯を歩み、どのように児童福祉に貢献したのか、明らかにしていきたい。研究方法としては、賀川ハルと村岡花子が書いた著作や手記や日記、そして直接賀川ハルに会った人たちからの聞き書きなどから分析していきたい。

なお、賀川ハルは、執筆の際に、賀川はる子、賀川ハル、賀川春子等の名前を使うことがあり、また村岡花子は、旧姓の安中花、安中花子、村岡花子等を使っているが、本稿では、「賀川ハル」と「村岡花子」で統一していきたい。

２．著作からみる賀川ハルと村岡花子の関係

村岡花子と賀川ハル、この二人の関係を考える上で、「著作」は大きな鍵となる。なぜならば、

生涯を通して、二人は多くの著作を残しており、そこに様々な二人の関係が示されているからである。

まず、賀川ハルの著作から見ていきたい。賀川ハルの処女作は、『貧民窟物語』（1920年）である[5)]。これは、豊彦と結婚した後、神戸のスラム街での暮らしを詳細に描いている。そして、３年後、ハルは２冊目の本『女中奉公と女工生活』を出版している[6)]。これは、15歳からの女中奉公一年間、そしてその後女工を七年勤めたハルの体験を書いたものである。どちらの本にも印刷は「村岡儆三」と奥付に記されている。儆三はハルの従弟で、村岡花子の夫である。

1922年、その３年前に花子と結婚した儆三は父の村岡平吉から福音印刷の取締役兼支配人の座を受け継ぎ、弟の斎は常務取締役となった。1923年９月１日、関東大震災が起こり、福音印刷の横浜本店は全壊、銀座本店は地震の後起こった大火災により全焼、そして信頼していた役員に騙され、福音印刷は倒産することになる。そのため、「村岡儆三」の名前で印刷された本はそれほど多くない。その中の二冊が賀川ハルの著作である。福音印刷はもともと聖書を印刷するために設立された会社であり、ハルのような本は少ない。ハルと儆三が従弟というより兄弟のように親しかったこと、ハルが福音印刷神戸工場の女工であったこと等が考えられる。この時期、儆三は、ハルの本だけではなく豊彦の本も印刷している[7)]。豊彦は1920年『死線を越えて』の出版でベストセラー作家になっており、逆に豊彦のほうが村岡兄弟を応援したいという気持ちを持っていたのかもしれない。本の奥付から賀川家と村岡家の関係が見えてくる。

1913年ハルが豊彦と結婚した時、豊彦の住まい兼教会は福音印刷神戸工場の近くにあった。距離として数百メートルほどであるが、豊彦が暮らすスラム街とその外ではまったく環境が異なり、一般の人達は行き来しなかったという。ハルは豊彦と結婚し、福音印刷を辞めたが、その後も豊彦と共に福音印刷にしばしば行っていた。もともと豊彦とハルが出会ったのは、豊彦が福音印刷神戸工場に毎週月曜日賛美歌と説教のために来た事がきっかけである。福音印刷はハルの伯父の村岡平吉が経営しており、平吉が神戸に来た時は工場の支配人がハルに連絡してくれていた。

ハルと豊彦が暮らすスラム街の住まい兼教会は、ごろつきが脅しにきたり、病人が転がり込んだり、豊彦は落ち着いて執筆できる環境になかった。そのため、豊彦はしばしば福音印刷に通っていたようである。ハルの日記の中に豊彦が「福音社に行く」ということが毎日のように書かれている。また、ハルが雨が降ったので「福音社に傘を持つて行く」と書いている箇所もあり、豊彦が一日中福音社で原稿を書いていることもあったようである[8)]。

ハル、豊彦、村岡家の関係は見えてきた。村岡花子との関係はどうであろうか。

1919年、後に教文館となる会社で編集者をしていた花子は『モーゼが修學せし國』を出版し、儆三がその印刷をしている[9)]。福音印刷は、もともと聖書を印刷する目的で設立された会社であり、村岡花子の本で福音印刷が印刷したものは少ない。もし1923年の関東大震災で福音印刷が倒産していなければ、もっと花子の本を印刷していたのかもしれない。

賀川ハル、村岡花子はともに生涯を通して、多くの著作を残している。特に村岡家が印刷業であったことから、出版された本の奥付を見ると、ハル、豊彦、花子、儆三の関係が見えてくる。

３．二人をつなぐ村岡平吉

ここで、二人の関係をみていきたい[10)]。賀川ハルの父親である芝房吉と、村岡儆三の母親である村岡はなは、弟と姉の関係になる。したがって、それぞれの子どもである賀川ハルと村岡儆三は従弟になる。村岡花子は儆三の妻であるので、ハルと花子は義従妹になる。

ハルの父である芝房吉は度々の火事により商売がうまくいかなくなり、義兄である村岡平吉の福音印刷合資会社の横浜本社に勤め始める。福音印刷は事業を順調に拡大し、神戸に支店をつくることになった。そして、ハルの父親の芝房吉は神戸へ転勤となる。ハルは家族と共に神戸へ引っ越し、家計を助けるために、福音印刷神戸工場の女工となる[11)]。

村岡儆三は平吉の三男である。長男の兄が病弱であり、次男の兄は他家の養子となったため、早くから福音印刷の後継者になることが決められていた。弟である五男の斎は新しい印刷方法を学ぶためにロンドンに行く。その途中神戸に寄港した時、ハルは斎を見送りに行っている。斎が日本を出発してすぐ、母親のはなの病気が悪化し、亡くなる[12)]。母を看取れなかった悔いから、帰国した斎は福音印刷のために懸命に働く。福音印刷は横浜本社だけでなく、神戸支店や銀座支店をつくる。村岡儆三は銀座支店の支店長であった。

村岡花子は東洋英和女学校を卒業した後、山梨英和女学院の教師となっていたが、小説を書く道を目指すために、山梨英和女学院を辞め、後に教文館と呼ばれる銀座の出版社で働くようになっていた。そこの印刷を福音印刷が扱っており、銀座支店長の儆三は花子と出会う。

賀川ハルと村岡花子をつなぐキーパーソンは、村岡平吉である。ハルの伯父、儆三の父、そして花子の舅にあたる。平吉は福音印刷合資会社の取締役兼支配人であり、日本語だけでなくアジア各国の聖書を印刷しており、「聖書の村岡」と言われていた[13)]。

賀川記念館で開催された「花子とハル」特別展では神戸市の岩村牧師が寄贈した明治時代の貴重な聖書が展示され、明治37年の聖書の奥付には「印刷　村岡平吉」と記されていた[14)]。筆者は来場者に、村岡花子の舅である「村岡平吉」について、この奥付を見せながら解説すると、来館者たちは当時の福音印刷の活躍がよくわかると言われていた。

ここで、村岡平吉について述べたい。明治43年の『開港五十年記念横浜成功名誉鑑（下）』には「福音印刷合資會社主村岡平吉君は印刷製本業に於て最古の經歴を有せらる、嘉永五年縣下橘樹郡小机村に生れ、明治初年より歐字新聞の一職工として初めて手を染むることゝなりし君は、熱心に忠實に其職務に勤勉し明治廿年仏蘭西新報の上海に轉ずるや、君また従ひて行き留まる一年、歸朝して製紙分社に入り、工場取締として工務を總攬すること十ヶ年、明治三一年辭して福音印刷合資會社を創立し、自から主幹となる、君聖書印刷に至功あり、最初我國にて行はるゝ基督教印刷物に其署名を見ざるは稀に、又熱心なる信者なり、故に其業務に於ても少しも間然する處なく、外人の信用特に篤し、今や業務厖大となり、歐文物及び高等印刷物は其特長として認めらるゝに至りしは、全く君が熟練なる賜なりと云ふべきなり」と書かれている[15)]。

村岡平吉は1852年神奈川県小机村に生まれ、歐字新聞の職工から始め、上海の仏蘭西新報で働き、高い印刷技術をもち、福音印刷合資会社を創立した。熱心なキリスト教徒であり、横浜の指

路教会の長老であった平吉は日本だけでなく海外の聖書も印刷していた。1922年平吉が亡くなった時、彼の葬式が指路教会で盛大に行われ、賀川豊彦が司式をした[16)]。

賀川記念館の西義人参事は「花子とハル」特別展を企画した時、「二人が具体的にどのように関係があるのか調べたが、それを明らかにするのはできなかった。しかし、NHK朝ドラで葬儀に賀川豊彦やハルが出演するのではと期待していた」と言う。ドラマのシーンに葬儀の場面がなかったことはすでに述べた通りである[17)]。

ハルの日記によると、平吉の葬儀の時、長男純基を妊娠中であり体調が悪かったが、伯父の葬式に参加したと書いている。

平吉のおかげで写すことが出来た一枚の写真がある。1914年５月８日金曜日に写された[18)]。今までハルと豊彦の結婚式当日の記念写真と考えられていたが、ハルの日記から、結婚した翌年に撮影されたものであることが明らかとなった。撮影した日のことについて、ハルの日記には「村岡の叔父が来て居ることを管間氏にて聞(ママ)て来たので二人で面会に吉野館へ行(ママ)。すぐ会ふて呉れないので元町の市内で二人が写真を取つた。一年前に結婚してうつすのは今が始めだ。二三軒本やを探つて再び吉野館へ行く。小一時間話して帰る。」とある[19)]。

ハルと豊彦は結婚式の記念写真を撮っておらず、一年後に初めて写真館で二人の写真を撮った。それは平吉が神戸に来た時のことである。ハルは伯父であり、花子の舅である村岡平吉と深いつきあいがあった。1914年５月８日、ハルは平吉が神戸に来ることを福音印刷神戸支店長の菅間氏から聞き、豊彦と二人で平吉に会いに元町まで行った。他に来客があったのであろうか、平吉と会えるまで時間があったので、二人は元町を散策し、元町の写真館で記念写真を撮った。そして、次の日５月９日土曜日に「六時から村岡の伯父を送るため二人で停車所へ行く。」と日記に書いている[20)]。

平吉は、家が貧しく女中奉公をしていたハルを横浜の家に引き取り学校へ通わせてくれ、伯母のはなが早くに亡くなった後もハルのことを気にかけてくれていた。平吉が神戸に来ると聞くと、豊彦と一緒に宿泊している旅館に会いに行き、次の日、再び見送りに行くほどであった。

また、花子にとっても、平吉は優しい舅であった。平吉の葬儀の時、「花子は自分を『マイ・ディアー』と呼んで抱きしめてくれた義父を思い出していた。平吉は、息子の妻が、キリスト教関係の出版に携わっていることを喜び、花子を文学にかける夢ごと、村岡家の一員として受け入れてくれた。」[21)]。

村岡平吉は、村岡家と賀川家を結びつけるキーパーソンである。

次に、ハルと花子がどのような生涯を過ごしたのか振り返っていきたい。まず、二人の子ども時代をみていきたい。

４．二人の子ども時代

賀川ハル（旧姓：芝ハル）は1888年３月16日、神奈川県横須賀市で生まれた。ハルは４人兄弟の長女であり、ハルが８歳の時に妹の文子が生まれるまで一人っ子として育った。文子の後、ヤ

へ、ウタが産まれ、４人姉妹となる。ハルの母親であるむらは、鈴木重吉の娘であった。鈴木家は江戸時代横須賀の御蔵番をしていた士族であり、明治維新により武士から平民となった。平民となった鈴木重吉は質屋を始めた。その店で勤めたのが芝房吉である。働きがよいのを見込んで重吉は娘のむらの夫にした。最初、房吉の質屋はうまくいっており、女中一人と下僕一人を雇い、ハルはお嬢様として育っていた。

しかし、ハルの父親は度々火事にあい、商売に失敗した。ハルは次のように書いている。「創業時代に度々の火災は父に取つては大打撃であつたが、僥まず奮闘した結果は希望を持つことが出来た。然し十年後は又も廃業のやむなきことになって、父は、義兄の經営になる印刷會社に社員となつて働くことゝ定まつた[22)]。」

ハルが豊島尋常高等小学校を卒業した14歳のころ、芝家は最も困窮しており、尋常小学校のすべての科目が「甲」で師範学校に行くことを望んでいたハルだったが、進学をあきらめ、女中奉公にいくことになる[23)]。

奉公先は親せきの家であったが、今までおじさん、おばさんと呼んでいた家も、女中奉公となると、まったく扱いは異なり、15歳のハルにはつらい一年だったようである。しかし、この一年で身に着けた掃除・洗濯・食事の準備などが、後に神戸のスラム街で賀川豊彦を助けるために役立った。もし、ハルが女中と下僕に仕えられたお嬢様生活を続けていれば、とてもスラム街での生活はできなかったであろう。

女中奉公となって一年後、横浜に住む伯父の村岡平吉がハルは勉強したいということを知った。「勉強し度い望みを持った若い者が永くそんなところに居つてはならない、奉公も一年すればよく解つたらう、もう帰つてくるがよい、そして自分の家から、學校に通はせ様か」[24)]と言い、住吉女学校へ通わせてくれることとなった。ハルは女中奉公を辞め、横浜の平吉の家へ行く。そこには大好きな伯母のはなや村岡家の子供たちがいた。村岡一家は全員キリスト教徒であり、日曜日に指路教会に通っており、ハルも一緒に行っていた。ハルは短い期間であったが、住吉女学校に通った。この女学校は指路教会の中に位置していた。その後、伯母が出産し、その手伝いをしなければならなくなったハルは学校へ通うことができなくなる。また、新しく福音印刷の神戸工場ができたため、ハルの父親の房吉は神戸へ転勤となり、ハルも家族とともに神戸へ移ることになった。最初、ハルは神戸の元町にあった父親の会社に弁当を届けていた。しかし、苦しい家計を助けるため、福音印刷の女工となることを決意した。もともと女中に仕えられていたお嬢様であり、師範学校に進学し先生になりたいと考えていたハルにとって、女工となることは抵抗があった。しかし、困窮した家族を助けるために、働くことを決意した。途中、一年ほど横須賀の親せきの家の養女になるために横須賀で過ごしたが、父親の房吉が病気となり、ハルは芝家の家計を支えなければならなくなったので、神戸にもどった。ハルはその働きぶりが認められ女工頭となり、女工生活も７年目となった時、福音印刷神戸工場に賛美歌を教えにきた賀川豊彦と出会う。

次に、村岡花子の子ども時代をみていきたい。

村岡花子は、旧姓を安中はなという。本人が花子と呼ばれることを望み、またペンネームの

「村岡花子」が一般的であるため、本稿において「花子」としている。実は、ハルも「はる子」「春子」などペンネームを使うことがあり、「子」をつけると上品な感じがすると書いている。

村岡花子は、1893年山梨県甲府市に生まれた。花子はハルより５歳年下になる。花子は８人兄弟の長女であり、父親の期待を一身に受けていた。花子の父親、安中逸平は静岡県の茶商であった。江戸時代末の開国以来、お茶は日本の大切な輸出品であり、静岡では茶の商売をするために外国人とつきあうことが必要となり、英語熱が高まっていた。そのため、外国人宣教師と付き合うようになり、父の逸平はクリスチャンとなった。花子は甲府生まれであるが、逸平が甲府に行ったのはキリスト教宣教師との関係からと言われている。当時、カナダ・メソジスト教会婦人伝道会社は山梨と静岡と横浜が宣教活動の場であり、父親の逸平は静岡から山梨へ行ったと考えられる。そこで甲府出身のてつと出会い、結婚し、甲府で花子が生まれた。逸平は、花子が２歳の時キリスト教の洗礼を受けさせている。逸平は、社会主義にも関心があり、商売そっちのけで社会運動に関わっていた。そのため、甲府で妻の親戚たちとうまくいかなくなり、花子が５歳の時、東京の品川に上京した。当時、品川は海辺の漁村であり、幼い花子は海辺で遊んだという。

花子は品川の城南尋常小学校を優秀な成績で卒業した。小学校の頃、病気で死にそうになった花子が辞世の句を詠んだ話は有名であり、優秀な花子を父親の逸平は何とか勉強させたいと考えた。しかし、自分の経済力では高等教育を受けさせてやることができないため、カナダ・メソジスト教会の宣教師に頼んで、東洋英和女学院の給付生として入学させてもらえるよう頼みこむ。給付生は一度でも落第すると退学しなければならないという厳しいきまりであったが、花子は懸命に勉強した。花子は一般の尋常小学校を卒業し進学したので、英和女学校に入学するまで英語を勉強したことがなかった。しかし、小学校から東洋英和女学院で学んでいる同級生たちはすでに英語を学んでおり、日常会話をカナダ人宣教師たちと楽しんでいた。最初、花子は英語がわからず苦労したが、懸命に努力を続けた[25)]。

次に、二人の高等教育と職業についてみていきたい。

５．二人の高等教育と職業

賀川ハルは、尋常小学校の時に優秀な成績であったが、家が貧しく、14歳から女中奉公をし、18歳からは福音印刷の女工として働いている。25歳で豊彦と結婚した翌年、1914年、豊彦がアメリカのプリンストン神学校とプリンストン大学へ留学することになった。同じ時期、ハルも横浜の共立女子神学校で神学を勉強することになった。ハルが26歳の時である。ハルは15歳から25歳までの間、１か月ほど横浜の住吉女学校に通ったが、それ以外勉強する機会がなかった。そのため、共立女子神学校で勉強することは、現在の教育システムで考えれば、中学校を卒業してすぐに大学へ行くようなものである。夫の賀川豊彦は、毎朝、弟子の武内勝とともに数学や科学や神学などをハルに教え、共立女子神学校の入学に備えた。ハルは３年間共立女子神学校で勉強したことで、後に日本やアメリカで宣教活動ができる力を身につけた。ハルは豊彦と出会ってから路傍伝道を一緒にしていたので、大勢の前で自分の信仰を証しすることができた。共立女子神学校

時代、ハルは路傍伝道する機会がなく残念がっている[26]。また、当時マイクがない場所が多かったが、200～300人規模の集会所であれば、ハルはマイクを使わなくても声は大きくよく聞こえたとハルを知る方々から伺った。

次に、村岡花子についてみていきたい。

花子は、東洋英和女学院で、予科２年、本科５年、高等科３年と10年間過ごし、英語を熱心に勉強し、学校の図書館の英語の本をすべて読んだと言われる。寄宿生たちはカナダ人宣教師と生活を共にするので、花子は宣教師たちからカナダ人の暮らしを見聞きし、ティータイムに紅茶やクッキーなどを楽しみ、そして、食事はナイフとフォークを使うという生活であった。日本にいながらにして、外国のような生活環境で花子は10年間過ごした。後に、『赤毛のアン』を翻訳する時、東洋英和女学院でカナダ人の暮らしをよく見聞きしていたのでプリンスエドワード島の情景がよく理解できたと言っている。

また、花子が入学した時の東洋英和女学院の生徒たちは、華族や貿易会社の社長令嬢など日本の中流・上流階級の子女であった。花子は、自分より８歳年上の伯爵令嬢、柳原燁子と出会い、生涯の友となる。燁子は10代で政略結婚をさせられ、一子を産んだが離縁された。23歳で東洋英和女学院に編入した燁子は英語にあまり関心がなく専ら和歌づくりをしていた。佐々木信綱を和歌の師としており、花子も信綱に紹介された。花子は信綱の娘の英語の家庭教師になることで月謝を払うことなく和歌の勉強ができた。この信綱門下で、片山廣子に出会う。片山廣子も東洋英和女学院の卒業生であり、花子より15歳年上であった。柳原燁子と片山廣子は著名な歌人となる。また、片山廣子はアイルランド文学の翻訳者でもあった。廣子は翻訳者の先輩として、花子に翻訳する際に良書を選ぶよう、そして本の選び方を助言する。

村岡花子は多くの翻訳書や児童文学を著述しているが、なかでも1927年『王子と乞食』は片山廣子が勧めてくれた本であり、花子が最愛の息子を５歳で失い、絶望の時、この本を読むことで立ち直った本である。花子は自分の子どもを失ったが、「世に在る人の子たちのために、道を照らすことこそ私の願いです」と語る[27]。

また、花子を翻訳家として最も有名にした『赤毛のアン』は、教文館の同僚であったミスショーが、太平洋戦争が起こる前、外国人は帰国しなければならなくなり、自分が何度も読んだ愛読書を花子に託し、いつか戦争が終わり、再び英語の本が日本で翻訳・出版できることを願った本である[28]。

1926（大正15）年11月号の『婦人新報』に、花子は「二つの小説」という随筆を書いており、その中で「民衆の代辯者―そこに文學者の使命がある」こと、そして「世に子を失った親は何百人何十人ゐるか知れない」「人の世のあらゆる喜び、かなしみを、豊かに語って呉れる者、即ち文學者」[29]であると、一人息子の死さえ癒してくれる文学者の使命に気づき、多くの児童文学作品を生み出すことになる。

次に二人の信仰についてみていきたい。

６．二人の信仰

賀川ハルの伯母と伯父（儆三の母と父）は熱心なキリスト教徒であった。そして、ハルにクリスチャンになってほしいと願っていた。ハルは伯母のはなが大好きで、小学校のころ夏休みになると、よく横浜の家に遊びに行っていた。村岡家は全員がキリスト教徒であるので、日曜日に礼拝に行く。子どもの時、ハルも一緒に指路教会に行っていた。しかし、「耶蘇教の本が横濱から送られてあつて、信仰を勧められたものだが文字が讀める様になつて私は時々開いて見たが、よみ憎い片假名、人の名前で面白くないのでそのまゝにしてゐた。」子ども時代のハルはキリスト教にまったく興味がなかった[30)]。

ハルは伯母が苦しんで死んだことから、「伯母の病苦以来、基督教と云う神が解らなかった。愛の神が不可解だったところが教師の説かれたところに依ると、神は愛だから試練がある、人にはそれが或場合非常な苦痛である。而しそれを以て神の愛を否定してはならない。愛する人類をより立派なものにするために鍛えられることそれが神の愛である。と説かれた。折りから隣の鉄工場で高く槌の音が聞える。説教者は言葉を続け『あの鉄にしてもそのままならばただの鉄であるけれども、火に入れ水に浸して打ち敲く後に立派な鋼鉄になるのである』と。丁度私の疑惑をすっかり説かれた心持がした。そして私は恥じた。知りもしないのに神の愛を否定したり生意気な考えを以ていたと悔いた[31)]。」

ハルは、福音印刷工場の集会で豊彦に出会い、その説教を聞いた時、長い間、伯母のはなが苦しんで亡くなったことに対する神への不信の気持ちが、その苦しみの中にも神の愛があるのだと気づき、気持ちが変わっていく。そして、1913年、24歳の時にハルは洗礼を受けた。

次に村岡花子の信仰についてみていきたい。

1895年、花子は２歳の時に甲府で洗礼を受けている。花子の父がキリスト教徒であったからである。父親は花子が優秀なので、カナダ・メソジスト教会の学校で勉強させたいと願い、10歳の時、花子は東洋英和女学院の給付生として入学を許可された。それから10年間、花子はカナダ・メソジスト教会の宣教師たちのキリスト教に基づいた教育を受けた。花子は８人兄弟の長女であるが、他の兄弟たちは高等教育を受けていないので、花子は家族の中で特別な存在だったと言えよう。

東洋英和女学院で花子に大きな影響を与えたのは、ブラックモア校長であった。ブラックモア校長は非常に厳格なキリスト教徒であったが、生徒たちに深い愛をもって接した。

花子は次のようなエピソードを紹介している。ブラックモア校長は「むすめたちよ（校長はいつでも私たちを、“Girls!”と呼びかけた）今から十五年、二十年、三十年ののちにあなたがたが今日のこの時代を思い返して、なおかつ、あの時分が一番たのしかった、一番幸福だった、としんそこから思うようなことが、もしあるとしたならば、私はそれをこの学校の教育の失敗だといわなければなりません。人生は進歩です。きょうはきのうよりも良く、あすはきょうよりもすぐれた生活へと、たえず前進して行くのが真実の生きかたです。若い時代は準備のときであり、その準備の種類によって次の中年時代、老年時代が作られていきます。最上のものは過去にあるの

でなく、将来にあります。旅路の最後まで希望と理想を持ちつづけて進んで行く者であってください」と生徒たちを励ました[32]。

この言葉は、生徒たちがそれぞれの人生において困難な状況にあるとき生徒たちを励ます言葉となった。カナダ・メソジスト教会婦人伝道会社の方針は、単にキリスト教の言葉を伝えるのではなく、聖書の教えを実践することにあった。東洋英和女学院などの教育機関を設立するだけでなく、来日後すぐ孤児院を設立しており、花子は学生時代この孤児院で奉仕活動をしている。

次に二人の結婚についてみていきたい。

７．二人の結婚

賀川ハルは、1911年夏、23歳の時に賀川豊彦に出会う。当時、一般的に労働者の休みは一日と十五日であったが、福音印刷社長の村岡平吉はキリスト教徒であったので、安息日である日曜日を休みにしていた。そして、工員たちに良い話を聞かせたいと、月曜日の朝に30分ほど牧師の説教と賛美歌の時間を設けていた。1912年、いつもの牧師に代わって若い牧師見習いがやってきた。ハルはその日のことを次のように記している。「『私は新川に住む乞食の親分であります』と蒲柳な質の持主とも思われない大声を出した。それでその言葉と、その声の大きいのに皆吃驚してしまった[33]。」

ハルは、最初、結核の病み上がりである豊彦を見て、顔が青白くやせた人だと思ったが、賛美歌を歌いだした途端、その声量と声の美しさに驚いた。そして、やがて豊彦は牧師に代わって説教するようになり、ハルはその説教に魅せられていった。

ある時、ハルは福音印刷工場からの帰り道、豊彦が路傍伝道をしている所に出会った。豊彦は熱心に路傍伝道をした後、住まいのあるスラム街にもどり、礼拝を行っていた。当時その場所は女性一人が足を踏み入れるような場所ではなかった。ハルは、何度もためらいながら、やがて豊彦の教会に通うようになった。そして、豊彦が慣れない手で病人のオムツを代えたり、赤ん坊に乳を飲ませたりしているのを見て、ハルは自然と手伝うようになった。

最初、ハルの父親である房吉は豊彦との結婚に反対していた。その理由の一つは、豊彦が結核を病んでいたからである。当時、結核は治療薬がなく、死の病と考えられていた。実際、スラム街の住まいでは、豊彦の茶碗は他の人に伝染してはいけないというので別にされていた。第二の理由はキリスト教である。房吉の姉である村岡はなは熱心なキリスト教徒であったが、弟の房吉はキリスト教を信じていなかった。そのため、ハルは豊彦に自分の家に来てもらい、自分の妹たちにキリスト教の話をしてもらうようにした。そうした努力によって、やがて房吉は豊彦との結婚を認めるようになった。

豊彦のほうは、本来であれば徳島の名家の出身であり、女工と結婚するなど考えられない家柄だった。また、豊彦は自伝的小説『死線を越えて』の中で書いているように、好きな女性がいて、女性に対して高い理想を持っていた[34]。しかし、強盗や殺人が日常茶飯事のスラム街に嫁にきてくれる女性はいなかったし、豊彦の兄の放蕩で賀川家は破産していた。また、実の父母は幼いこ

ろに亡くなっており、父の本妻である義母も結婚に反対するような力はもはや持っていなかった。

ハルが豊彦と結婚する時に認めてもらうのが難しかった相手は、豊彦を敬愛している救霊団の団員であった。彼らから結婚を認めてもらうことが必要だった。豊彦の一番弟子である武内勝は、豊彦の結婚相手の条件は二つあると書いている[35)]。一つは本当に献身のできる健康な人でなければならぬということ、もう一つは余程強い忍耐力のある人でなければならぬということである。スラム街で住む豊彦と結婚するということはごろつきや酔っ払いに金の無心をされても怖がらず辛抱できる必要があった。ハルはこの二つの条件に合格し、救霊団の団員から認めてもらうことができた。

1913年５月27日、ハル25歳、豊彦25歳の時、二人は結婚する。結婚式が終わるやいなや、ハルと豊彦はスラム街に戻り、ハルは花嫁姿のまま、おみつのオマルの世話をしたという話は有名である。

次に、村岡花子の結婚についてみていきたい。

1919年、花子は勤めていた銀座の出版社で村岡儆三に出会う。当時、儆三は福音印刷銀座支店の支店長であった。上の兄たちが印刷業を継がないので早くから儆三が福音印刷の跡継ぎと決められていた。当時、儆三には結核で療養している妻がいた。妻は長男を産んですぐに結核を発病し、三年ほど入院していた。その子供は儆三の兄が面倒を見ていた。兄の体調が悪くなってからは儆三の妹がその子の面倒をみていた。妻の実家もキリスト教徒であり、治る見込みがないので離縁してほしいと再三申し出ていた。しかし、儆三は決断できずにいた。そんな頃、儆三は花子と出会い、恋に落ちた。二人は道ならぬ恋であると苦しみ、その情熱を70通あまりの手紙に残している。やがて儆三は離婚することを決意し、出会って６か月後、花子が26歳の時、二人は結婚した。

ある雑誌から「あなたが今日まで最も良い指導を受けたと感じている男性は誰ですか？」という質問をされた時、花子は「私のこれに対する答は、『村岡敬三氏（私の夫です)』」と回答している[36)]。儆三は語学に堪能で幅広い教養をもっていたので、それまで文学しか興味がなかった花子に幅広い視野をもつよう導いてくれた人物であった。

８．賀川ハルと村岡花子の子どもたち

賀川ハルと豊彦の間には３人の子供がいる。長男の純基、長女の千代子、次女の梅子である。1913年、賀川ハルは豊彦と結婚したが、９年間子供が出来なかった。スラム街のすさまじい環境の中では、とても子供をつくるどころではなかったのだろう。ハルは、「幸いなことに、結婚しましてから九年間は、子どもが与えられませんでしたので、十分に働けたと思い、これもすべて神の摂理であったと信じます。」と書いている[37)]。

豊彦が神戸でセツルメント活動を始めてからずっと、豊彦もハルもごろつきや酔っ払いに金を無心され、断ると、刀を振り回されることが日常茶飯事であった。1921年、豊彦が台湾に宣教活動に行く時もごろつきがハルを脅し、ハルの身の危険を感じた周囲が豊彦と一緒に台湾へ行くこ

とを勧め、急遽二人は一緒に台湾へいくことになった。この旅は二人にとって新婚旅行となり、この時にハルは妊娠し、1922年、ハルが34歳の時、息子の純基を出産する。子供が好きな豊彦は大いに喜び、「坊やの赤飯（あかまま）」という詩をつくっている[38)]。

長男の純基は、当時世界の三大聖人と言われるほど著名になっていた賀川豊彦の息子というプレッシャーをいつも感じていた。豊彦の強い勧めで千葉大学医学部を受験し、合格、卒業するが、医師国家試験を受けず、医師にならなかった。純基は教会音楽の音楽家になる。1925年、長女の千代子が産まれる。千代子は医師になる。1929年、次女の梅子が産まれる。梅子は牧師となり、アメリカに行く。母のハルがアメリカで講演した時、通訳を務めた。

夫の賀川豊彦が亡くなった後、ハルは東京の雲柱社と、神戸のイエス団の両方の理事長に就任し、賀川豊彦が展開していた社会福祉事業を受け継ぐ。長男の純基は賀川豊彦記念松沢資料館が出来た時、館長となった。また神戸の賀川記念館館長を純基の息子、豊彦の孫である賀川督明が務めていたが、2014年９月17日61才で亡くなった[39)]。

次に村岡花子についてみていきたい。

1920年、花子は28歳の時、息子の道雄を出産する。1926年、道雄は５歳で疫痢のため亡くなる。花子は嘆き悲しむが、「百ヶ日を過ぎたあたりから、少しずつ花子の心に変化が起こる。絶望の底で、ふと心の耳に聞こえてきた言葉があった。『神はその独り子を賜うほどに世を愛し賜えり』聖書のヨハネ伝３章16節である。幼い頃から、数え切れないほど読みもし、聞きもした言葉が、最愛の道雄が帰らぬ人となった今、初めて、現実味を持って花子の胸に迫ってきた[40)]。」

道雄は花子に本当の愛を教えてくれた。道雄の死後、花子は一人の子どもの母親としてではなく、多くの子どもたちの母親になろう、子供たちに良い本を沢山つくろうと決心する。

1934年、花子は妹梅子の長女、みどりを養女とする。みどりは二人の娘を産む。美枝と恵理である。NHKテレビドラマの原作となった『アンのゆりかご』は孫の村岡恵理の作品である。平成になり、『赤毛のアン』の著作権が切れ、村岡花子以外の翻訳家が訳すことができるようになった。娘のみどりや孫の美枝と恵理は、このままでは村岡花子の作品が忘れ去られてしまうと危機感を感じた。彼らはそれまで保存していた村岡花子の書斎を公開し、「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」を開いた。また、孫の村岡恵理は『アンのゆりかご』など多くの作品を出版し、村岡花子の文学にかけた思いを現在に伝えている。

９．賀川ハルと村岡花子が体験した関東大震災

1923年９月１日、関東大震災が東京と横浜を襲った。

賀川豊彦は翌日の新聞でこの大震災を知り、すぐに神戸から船で横浜に向かう。そしてすさまじい被害を目にすることになる。被害状況を把握し、必要な物資を調査した豊彦は、横浜の村岡家の消息を知りたいと思いながらも、一刻も早い被災者支援をするために神戸にもどる。ハルは神戸で各家を訪問し、布団や衣類などを寄付してもらっていた。豊彦とハルは街頭募金や講演会などで資金を集め、物資を調達し、再び東京に向かう。

豊彦は『地球を墳墓として』に次のように書いている。「私は横濱に多くの知己を持ってゐた。私の妻の従弟は山下町にある相當に大きな印刷會社の社長であり　私と妻の結婚を媒酌してくれた人はそこの支配人であった。それで餘程それらの人々の運命を尋ねたかつたが　私は自分の血縁知己の人々を尋ねる為めに來たのではなく　全く東と西とのキリスト教の救援團體の連絡を取りに來たのだから　一刻も早く　その連絡を取ることに努めなくてはならぬと思つたので　私事を顧ることを全く抛擲した。そしてまた郵船會社の三島丸へのランチの出る横濱ドック会社の波止場に來た。後で知つたことであったが　妻の従弟の印刷工場では約四百名の職工（その中の多くは製本女工）の内　逃れ得たものは僅かに八名位で　社長　支配人其外凡ての職工は煉瓦の下に埋れて死んで了つたと云ふことであった[41]。」

その年の10月末、豊彦とハルは東京の被災者を支援するため東京へ移る。ハルが35歳の時である。

被災直後のハルの日記には関東大震災や村岡家に関することは書かれていないが、震災から５年後の1928年12月29日（土）のハルの日記に次のようなことが書かれている。「昨夜ハ雨も少し降り夜半から風がひどい。死んだ水上や村岡一家の夢を見たので目を醒ましてからあの大震災の当時を追憶した。建物の下敷などになつて肉体の苦痛もそうであろうが、その場合の精神的苦痛ハ、母ハ子に、子は親に思ひを寄せ、世の終りとも思へる。その出来事に処して、たとへ堪い苦痛を味ふだろう。何にも考へる暇なく命の終りが有れはまだしも、意識が明かで救ひ出される望もなくなつた時の気持を考へれば、その災害をまぬかれた自分など、少し位の困難や苦痛がよしあつたとしても何のこともなく切り抜け得る筈であると今朝つくづく（注：づくは「く」を長くした字に点をふっている）思ふた[42]。」

ハルは子どもの時から横浜の伯母の家に行き、村岡家の子どもたちと日曜礼拝へ行っている。また、女中奉公を一年間した後、16歳の時、伯父の平吉が横浜の家に呼んでくれ、短い期間であったが、住吉女学校に通わせてくれた。17歳で、家族とともに移った神戸では、伯父の福音印刷神戸工場の女工となる。また、豊彦がアメリカ留学する時、26歳のハルは横浜の共立女子神学校入学へ入学するが、入学前村岡家で泊まっている。また、学校が休みの月曜日には村岡家に行っていた。ハルは儆三の妹の雪と姉妹のように仲がよかった。雪は関東大震災の時、水上家の養女になっており、震災で水上家は全員亡くなる。また、ロンドンに行くとき神戸港へハルが見送りに行った弟の斎も横浜の工場が全壊し、工員とともに亡くなった。

ハルは震災から５年たった1928年のある夜、震災で亡くなった村岡家の人々の夢を見て、建物の下敷きになってどんなに苦しかったであろうかと思うと眠ることができなくなった。震災の後、ハルは募金やふとん集め等に明け暮れ、そして10月末には拠点を神戸から東京へ移し災害支援に携わり、村岡家の人々を偲ぶ暇もないほど忙しい日々を過ごしていた。震災から５年、考えると眠れなくなるほど村岡家の人々を亡くしたハルの心の傷は大きかったのかもしれない。

当時、東京の大森に住んでいた村岡花子と儆三と息子の道雄は命だけは助かった。しかし、銀座にあった、儆三の福音印刷東京本社は震災の後起こった大火災で焼失した。横浜の工場は倒壊

し、弟の斎は多くの工員とともに亡くなる。そして、儆三の妹でハルと姉妹のように仲のよかった雪や、また、雪が世話していた、儆三と前妻の子どもも亡くなる。さらに悪いことに、信用していた会社の役員に騙され、福音印刷は倒産し、負債を抱えることになった。絶望した儆三を花子は支え続け、後に、二人は新しい印刷会社「青蘭社書房」を設立する[43)]。

次に、二人の児童福祉活動をみていきたい。

10. 二人の児童福祉活動

賀川ハルは、15歳から女中奉公と福音印刷の女工として働き、24歳で豊彦と結婚した後、1912年から1923年まで神戸のスラム街で困っている病人や子どもたちのために働いた。当時スラム街ではトラホームが流行しており、ハルは子どもの点眼をしているうちに感染し、右目を失明した。そして、1923年９月１日、関東大震災が起こった後、東京の被災地で支援にあたる。震災後３年ほどして、一度関西へもどり、西宮市瓦木に家を構えたが、東京市から震災復興のため豊彦に要職についてほしいと懇願され、再び東京に拠点を移す。神戸のセツルメント活動については一番弟子の武内勝が、そして無料診療所はハルの妹の芝八重医師らが継続する。

1960年、夫の豊彦は72才で亡くなった。豊彦の死後、ハルは東京の社会福祉法人「雲柱社」と関西の社会福祉法人「イエス団」の理事長となり、それぞれがもつ児童福祉事業を運営する。これは豊彦の死後20年以上に及ぶ。これらの事業は現在も継続・発展している。

2017年４月現在、東京都を中心に活動している社会福祉法人「雲柱社」は、児童館事業42か所、保育事業22カ所、グループかがわ事業（障碍児・者支援）９か所、子ども家庭支援センター事業ブロック13か所、合計86か所で事業を展開している[44)]。

関西一円で保育事業を中心に展開している社会福祉法人「イエス団」は、2017年12月現在、兵庫ブロック、京都ブロック、大阪ブロック、東兵庫ブロック、四国ブロックで合計39か所の施設を持っている。ほとんどは保育所事業であるが、兵庫ブロックに高齢者施設や賀川記念館、大阪ブロックや四国ブロックに乳児院、京都ブロックに障害者施設等が含まれている[45)]。

ハルは、豊彦と出会って以来、最初は神戸のスラム街で活動し、関東大震災以降は震災でスラム街のようになった東京の本所を中心に復興支援をし、そして夫の死後は数十カ所以上の社会福祉事業を経営する社会福祉法人の理事長となり児童福祉事業に携わった。1981年10月１日、ハルが93歳の時、これらの功績が認められ、「東京都名誉都民」を受賞した[46)]。1982年５月５日、賀川ハルは94才で亡くなる。

次に、村岡花子についてみていきたい。

村岡花子は東洋英和女学院学生時代から矯風会のメンバーとして活動していた。矯風会は1886年創設以来キリスト教の精神に基づき女性と子どもの人権を守り、その福祉への貢献を目標に掲げており、花子も会報に禁酒運動や廃娼運動等の記事を書いている。

1932年から、花子はJOAK（NHKの前身）でラジオ番組「子供の新聞」を担当し、番組最後の「ごきげんよう、さようなら」で人気を博したが、1941年太平洋戦争の開戦によってラジオでも

検閲が始まり降板した。

第二次大戦中、ハルの夫である賀川豊彦はベストセラー『死線を越えて』により、世界中で知られている人物であったため、反戦容疑やスパイ容疑などで逮捕されたり憲兵に常に監視されていた。同じ家に住むハルも同様である。

一方、東洋英和女学院で10年間英語を学び、多くの外国人宣教師や外国人教師と親しくしてきた花子も戦争中英語をまったく使うことができなかった。

1939年、世界情勢が悪化し、教文館の同僚であったミス・ショーがカナダへ帰国しなければならなくなった時、花子は“Anne of Green Gables”を受け取る。ミス・ショーは戦争が終わり再び平和な時代が来たら、この本を日本の子どもたちのために翻訳し出版してほしいと言い、帰国する。花子はその思いを受けとめ、空襲で防空壕へ逃げる時も、この本と翻訳原稿を必死で持ち出した。戦後、人々が今日食べる物を手に入れることで精いっぱいの中、なかなか出版してくれる会社が見つからなかったが、1952年、ついに『赤毛のアン』を出版することが出来た。

外務省ホームページ（北米）の中で村岡花子を次のように紹介している。「1927年にマーク・トウェインの『王子と乞食』を翻訳・出版して以来、『スー姉さん』、『リンバロストの乙女』、『少女バレアナ』、『そばかすの少年』など、多くの家庭文学の翻訳を手がけた。また、文筆活動以外にも、1932年から1942年までNHKラジオ番組『コドモの新聞』に出演し、人気を博した。1939年、戦争により日加関係が悪化したため本国へ帰るカナダ人宣教師から、モンゴメリ作の“Anne of Green Gables”を寄贈され、戦時中もひたすら翻訳を続けた。同書は、1952年邦題『赤毛のアン』として出版に至った。その後、モンゴメリ作品をはじめ多くの家庭文学の翻訳を手がけ、1960年には藍綬褒章を受章[47]。」

これは、花子が翻訳した『赤毛のアン』を読んだ多くの日本人がカナダのプリンスエドワード島に憧れ、旅行し、カナダとの友好に大いに貢献していることによる。BBC JAPAN NEWSによれば、「人口15万人のプリンスエドワード島には、毎年約3500人の日本人が訪れており、この島にやって来る外国人観光客として最多水準となっている[48]。」

1967年、花子は、養女のみどりが夫の仕事でアメリカに滞在している時、初めて海外旅行をした。その時、最初プリンスエドワード島にも行く予定であったが、みどりが出産を控えていたこと、そして、花子自身が自分の心の中に描いているプリンスエドワード島のイメージを大切にしたいと考えプリンスエドワード島を訪問することがないまま、1968年75歳で亡くなる。夫の儆三が75才で亡くなった５年後のことである。

11. まとめ

村岡花子と賀川ハルは親戚である。ハルと花子の夫儆三は従弟であり、ハルと花子は義従妹になる。ハルの伯父、花子の舅である村岡平吉が創立した福音印刷は両家をつなぐものであり、それはハルや豊彦や花子の本の奥付からも明らかである。

また、両家をつなぐ人物として村岡平吉はキーパーソンである。平吉は「聖書の村岡」と言わ

れ、日本だけでなく、フィリピンや中国やインドなどの聖書を印刷している。彼は、ハルの伯父であり、花子の舅である。ハルが勉強したいことを知り、平吉は自分の家に住まわせ住吉女学校へ通わせてくれた。また、早くに亡くなった伯母から姪のハルのことを頼まれ、いつも心遣いしてくれていた。また、花子にとっても平吉は優しい舅であり、1919年に儆三と結婚した花子によく気遣いしてくれると花子自身が書き記している。

1923年９月１日、東京や横浜を襲った関東大震災では、賀川豊彦とハル夫妻は災害支援に全力で取り組んだ。一方、親戚である村岡家の事も気にしており、亡くなった村岡家のことを震災後も偲んでいる。一方、村岡家は震災により家族や多くの工員を亡くし、そして会社も倒産する。絶望に陥っていた儆三を花子は支え、新しい印刷会社を興す。

ハルは豊彦とともに神戸のスラム街で働き、そして関東大震災以降は東京で災害支援に携わり、夫が亡くなった後は20年以上にわたって、関東と関西の２つの社会福祉法人の理事長として多くの児童福祉事業に携わる。また、花子は『赤毛のアン』の翻訳など多くの児童文学作品を翻訳し、小説や随筆等も数多く執筆している。最愛の一人息子が亡くなったことをきっかけに一人の母親としてだけでなく、多くの子どもたちの母親として、文学を通して児童福祉に貢献した。

本稿では村岡花子と賀川ハルの親交について、そして二人がどのような生涯を過ごしたのか、どのように児童福祉に貢献したのか明らかにしてきた。今後、二人の社会福祉活動を詳しく分析していきたい。

追記）特別展「花子とハル」を企画された賀川記念館関係者、語り部の方々、特に賀川記念館の西義人参事に深く感謝申し上げたい。また、特別展に来館され様々な質問をして下さった来場者のおかげで、多くの発見や気づきがあり、本稿をまとめる機会となった。

引用文献

１）神戸新聞2014年７月７日。
２）村岡恵理『アンのゆりかご～村岡花子の生涯』新潮社、2011年、194頁。
３）神戸新聞2014年９月３日。
４）神戸新聞2014年７月７日。
奈須瑛子「村岡平吉と福音印刷～賀川ハルの系譜～」『雲の柱』第８号、1988年。
５）賀川はる子『貧民窟物語』福永書店、大正９年。
６）賀川はる子『女中奉公と女工生活』福永書店、大正12年。
７）賀川豊彦『イエスと自然の黙示』警醒社、大正12年。村岡儆三が印刷。
８）賀川ハル「1914年日記」三原容子編『賀川ハル史料集　第１巻』緑蔭書房、2009年、170頁。
９）安中花子『モーゼが修學せし國』救世軍本部、大正８年。
10）「ハル関係系図」（賀川豊彦記念松沢資料館作成）三原容子『賀川ハル史料集　第１巻』緑蔭書房、2009年、4頁。
11）賀川はる子『女中奉公と女工生活』前掲書、54－55頁。
12）賀川はる子『女中奉公と女工生活』前掲書、119頁。
13）『紙之新聞』2014年10月２日。

14)『聖書』明治37年。印刷は村岡平吉。
15) 森田忠吉編『開港五十年記念横浜成功名誉鑑（下）』横濱商況新報社、明治43年、700－701頁。（『明治後期産業発達史資料第750巻』龍添書舎、2005年の中に含まれている。）
16) 村岡恵理、前掲書、194頁。
17)『毎日新聞』2014年９月11日。
18) 賀川豊彦写真集刊行会編『賀川豊彦写真集』東京堂出版、1988年。
19) 賀川ハル「1914年日記」前掲書、165頁。
20) 賀川ハル「1914年日記」前掲書、165頁。
21) 村岡恵理、前掲書、194頁。
22) 賀川はる子『女中奉公と女工生活』前掲書、54頁。
23) 三原容子『賀川ハル史料集　第１巻』緑蔭書房、2009年、４頁。
24) 賀川はる子『女中奉公と女工生活』前掲書、49頁。
25) 村岡花子『女性の生き甲斐』牧書店、昭和28年、169頁。
26) 賀川春子「信仰生活の試練」『婦人世界』1925年11月（三原容子『賀川ハル史料集　第１巻』緑蔭書房、2009年、54頁）。
27) 村岡花子「うろこのごときもの」『若き母に語る』池田書店、1960年。
マーク・トウェーン著、村岡花子訳『王子と乞食』岩波文庫、1934年。
28) ルーシ・モード・モンゴメリ著、村岡花子訳『赤毛のアン』三笠書房、2008年。
29) 村岡花子「二つの小説」『婦人新報』大正15年11月号(344号)、548－549頁。
30) 賀川ハル『女中奉公と女工生活』前掲書、120頁。
31) 賀川ハル「乞食の親分」『雲の柱』第８号、1988年、10－11頁。
32) 村岡花子『女性の生き甲斐』前掲書、170頁。
33) 賀川ハル「乞食の親分」前掲書、８－９頁。
34) 賀川豊彦『死線を越えて』改造社、大正11年。
35) 武内勝『賀川豊彦とそのボランティア』武内勝口述刊行委員会発行、1973年、91頁。
36) 村岡花子『女性の生き甲斐』前掲書、205頁。
37)「インタビュー　武蔵野の森　賀川ハル先生を訪ねて」『湖畔の声』1961年10月（三原容子『賀川ハル史料集　第３巻』緑蔭書房、2009年、52頁）。
38) 長男純基の誕生時に作った詩（賀川記念館ウェブサイト「予言詩人　賀川豊彦」）2017年12月30日検索。※後に、純基は詩がプレッシャーだったと語っている。
(http://www.core100.net/lab/pdf_torikai/yogenshijin.pdf#search='%E8%B3%80%E5%B7%9D%E8%B1%8A%E5%BD%A6+%E9%95%B7%E7%94%B7+%E8%AA%95%E7%94%9F+%E8%A9%A9')
39)「賀川督明氏追悼～一閃の光芒を遺して～」『友愛』（NPO法人賀川豊彦記念・鳴門友愛会）2014年12月25日。
40) 村岡恵理、前掲書、217頁。
41) 賀川豊彦『地球を墳墓として』アテネ書院、大正13年、89－90頁。
42) 賀川ハル「1928年日記」三原容子編『賀川ハル史料集第２巻』緑蔭書房、2009年、89頁。
43) 村岡花子『お山の雪』青蘭社書房、昭和３年。印刷者は村岡儆三。
44) 雲柱社（http://fukushi.unchusha.com/unchusha_map.html）2017年12月25日検索。
45) イエス団（http://www.jesusband.jp/sisetu.html）2017年12月25日検索。
46) 東京都生活文化局
(http://www.seikatubunka.metro.tokyo.jp/bunka/bunka_seisaku/files/0000000230/meiyotomin-ichiran.pdf) 2017年12月28日検索。
47) 外務省（http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/canada/jca80/06_muraoka.html）2017年12月28日検索。
48) BBC（http://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-40427524）2018年１月５日検索。

受理日　平成30年３月２日